

## 忘れ物

### 目次

要約	12
はじめに	4
1. 忘れ物の実態	5
●忘れ物の頻度	5
●忘れ物の種類	6
●忘れ物に対する反応	8
2. 忘れ物への意識	12
●時間割りと忘れ物	12
●なぜ忘れるのか	16
3. 宿題	19
●忘れ物の王様「宿題」	19
●なぜ忘れるか	20
●しつけのきびしさと忘れ物	24
4. 忘れ物をする子ども	28
●子ども自身のタイプ	28
まとめに代えて	29
地球社会の子どもたち ① ニュージーランドーその1 Tomorrow's Schools	深谷昌志 30
資料1 調査票見本	35
資料2 学年・性別集計表	42

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

□□□ □  
 □ 調査レポート □ □  
 □□ 忘れ物 □ □  
 □□□ 要約 □

東京学芸大学教授 深谷和子  
 目黒区立不動小学校教諭 矢部 崇

### 1. 忘れ物の頻度

週に3回以上忘れ物をする子は19.6%で、逆にほとんど忘れ物をしない子は21.1%である。(図1)



### 2. 忘れる物は……?

多い順に宿題、提出物、下じきであるが(図2)、下じきは忘れてもしかられないし(図4)、忘れても困らない。(図6)



### 3. 時間割りとの関係

忘れ物の少ない子は、学校から帰ってすぐに時間割りをそろえるが、忘れ物の多い子は、次の日の朝にそろえる傾向にある。(表1)

#### ● 調査概要

1. 調査主題 忘れ物
2. 調査視点 子どもたちの忘れ物が多い、という声をよく耳にする。子どもたちの忘れ物とそれをとりまく環境を調査し、実態を

探ってみる。

3. 調査項目 何を忘れるか、忘れる頻度、忘れ物をしないための工夫、忘れ物をすると困るか、忘れ物をすると担任の先生はしかるか、忘れ物をしたらどうするか、忘れ物について思うこと。

#### 4. 忘れ物について

忘れ物は、本人の努力次第でなくなると考えられるが、忘れ物の多い子は、「性格だからしかたがない」と考えていたり、他人のせいにしたりする傾向がある。(表4)



#### 5. 宿題を忘れる理由

本当に忘れることもあるが、知っているわざと宿題をやらないことも、少なくない。(図15、図16)

#### 6. しつけと忘れ物

親も先生も、忘れ物や宿題については、勉強と同じかそれ以上にきびしく言っている。(図19、図22)



#### 7. 子どもの性格とのかかわり

忘れ物の少ない子は、自分のことは自分でするし、整理整頓が上手である。(図24)

4. 調査時期 1989年4月～5月  
5. 調査対象 東京、千葉、神奈川、埼玉の小  
学4・5・6年生  
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

#### 7. サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	255	222	477
5年	246	255	501
6年	272	297	569
計	773	774	1,547



## はじめに

子どもたちが毎日学校に出かけようとして、「ってきます」と言えば返ってくるのが、「いってらっしゃい、気をつけてね」と「忘れ物ない?」という親の言葉であろう。確かに何歳になっても、「忘れ物ない?」と言われて、ハッと気づくことがある。とくに子どもの場合、毎日時間割りがちがうし、学校へ持っていく物もちがっている。毎日、「明日の時間割りは」と、次の日の準備をするのも結構大変だろう。

ところが準備をしたにもかかわらず、学校に着くやいなや、「あっ、シマッタ!」と思うことも少なくない。これが忘れ物である。「確かに入れたはずの国語の教科書がない」などということは、教室ではよくある話である。むろんおとなも、忘れ物をする。物を持ち歩いている以上、忘れ物は避けられないことだろう。しかし完全に忘れ物をなくすことは無理としても、忘れ物を減らすことは、努力次第でどうにかできそうな気がする。したがって、どこの学校の生活指導でも、「忘れ物がないようにしよう」というような目標をたてているのだろう。

忘れ物は、昔から、そして、これからもずっと存在し続けるだろう。そうした忘れ物について、今の子どもたちは、何を考え、どう対処しているのだろうか。子どもと忘れ物を取りまいている環境を交えながら、本調査の結果を報告したいと思う。



# 1. 忘れ物の実態



## 忘れ物の頻度

子どもにとって——というより、人間にとって——忘れ物につき物だが、子どもたちは、実際にどのくらい忘れ物をしているのだろうか。一口に忘れ物といっても、様々である。教科書、ノートにはじまって、勉強に使う物

すべて、また、先生への提出物、そして宿題など、実に多岐にわたる。まずそれらを全部合わせて、忘れ物の頻度をさぐってみた。その結果が、図1である。「ほぼ毎日、何かを忘れてる」という「困ったちゃん」は全体

図1 忘れ物をする回数

	週に3~4回	週に1~2回	月に1~2回	ほとんどない
全体	13.8	29.5	29.8	21.1
男子	17.4	30.2	28.1	15.4
女子	10.2	28.6	31.8	26.8

(%)

多いグループ (男子) / 少ないグループ (女子)

2.6

の5.8%で、40人のクラスだとしたら、2人、また、忘れ物は男子のほうが多いこともわかる。さらに「週に3～4回忘れる」準「困ったちゃん」も13.8%いる。逆に「ほとんど忘れ物をしない」子は、全体の5分の1にあたる21.1%でしかない。

そこで、この図1から、「ほぼ毎日・週に3

～4回忘れ物をする」子を「忘れ物の多いグループ(以下、多いグループとする)」約20%、また「ほとんど忘れ物をしない」子を、「忘れ物の少ないグループ(以下、少ないグループ)」約20%とし、子どもたちと忘れ物とのかわりを探ってみよう。

## 忘れ物の種類

さて、子どもたちは、実際にどんな物を忘れる場合が多いのだろう。例示の中から、忘

れる回数の多い物を選んでもらったところ、図2のような結果になった。忘れ物で最も多

図2 何を忘れるか

(%)

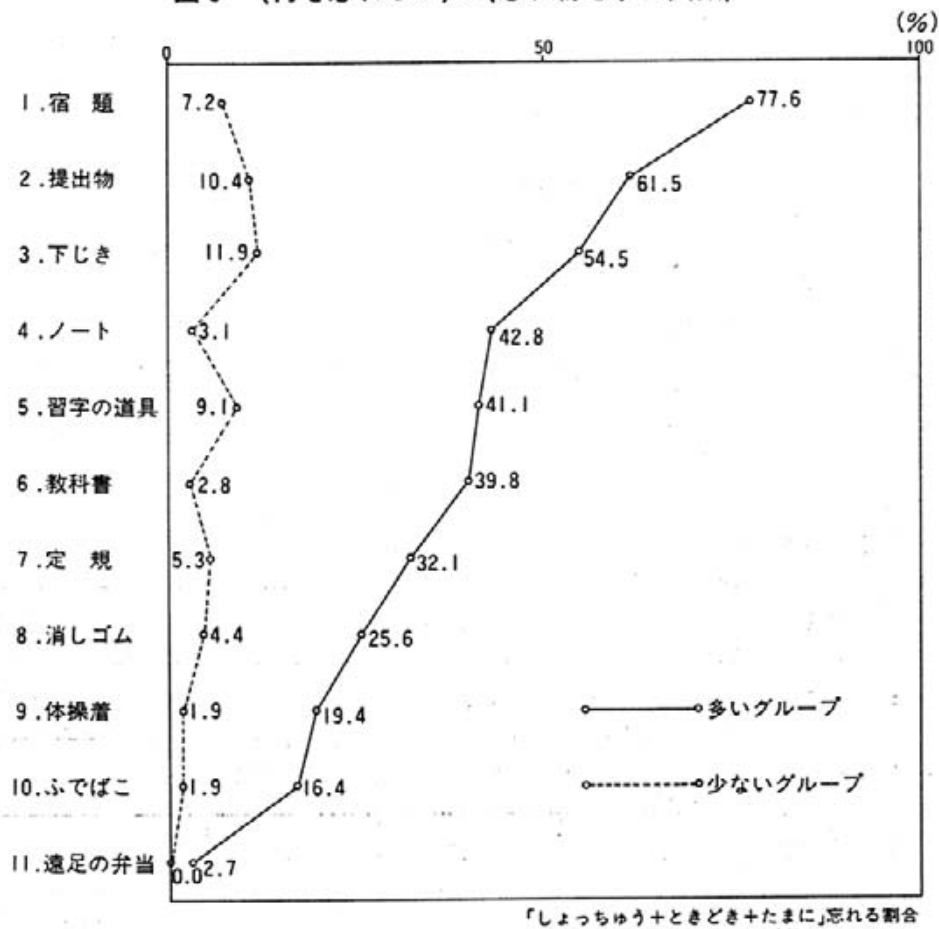
		とどろき 忘れる	たまに 忘れる	あまり 忘れない	ほとんど 忘れない	
1.宿題		5.0	10.2	19.6	25.0	40.2
2.提出物	2.3	10.0	19.3	30.2	38.2	
3.下じき		6.0	12.1	19.7	55.4	
4.習字の道具	1.7	5.9	15.9	22.5	54.0	
5.教科書	1.1 4.6	13.8	28.4	52.1		
6.ノート	0.7 4.9	13.4	26.4	54.6		
7.定規	3.8 3.7	9.0	18.6	64.9		
8.消しゴム	1.5 4.3	7.4	17.2	69.6		
9.体操着	2.0 0.5	6.0	17.0	74.5		
10.ふでばこ	0.3 2.1	5.1	12.4	80.1		
11.遠足の弁当	0.3 0.1 0.5			97.6		

いのは「宿題」であり、次に「提出物」である。しかし、この2つは、いわゆる持ち物としての忘れ物には入らない。3位の「下じき」以下が、いわゆる忘れ物である。ほほえましいことにさすがに、「遠足の弁当」は忘れないようだ。

これを、先のグループに分けてみると、図3のようになる。「忘れ物の多いグループ」

の忘れ物は、「宿題」をトップに、「提出物」「下じき」と続く。つまり、忘れ物が多いか少ないかを判断するには、この上位にランクされる物を見ればわかるであろう。しかし、「忘れ物の多いグループ」の子どもは、何によらず、とにかく、まんべんなく忘れていて、「遠足の弁当」まで忘れるとはどうしたことか。

図3 (何を忘れるか)×(忘れ物をする回数)



## 忘れ物に対する反応

忘れ物をすれば先生にしかられるのが常である。そこで図4は、忘れ物をしたときの先生の様子を示した。忘れて先生にしかられる物は、「宿題」「提出物」である。この順位は、先の図2の結果と一致する。つまり、忘れる→しかられるという図式が成り立つ。ところが、図2で第3位の「下じき」は、忘れたとしても、先生はあまりしからないう

だ。また「体操着」は、図2によるとあまり忘れないほうの物である。しかし、1度忘れると、先生はかなりしかっていることが図4から読み取れる。一様に、文房具が下位にランクされているのも特徴だ。忘れ物をすれば、先生にしかられるのを覚悟するというのは、その忘れ物の種類にもよるのである。しかし、先生の対応も、子ども側から見ると様々である。

図4 担任の先生がしかる忘れ物

(%)

	とてもしかる	少ししかる	あまりしからない	ぜんぜんしからない
1.宿題	34.3	37.6	19.4	8.7
2.提出物	32.7	36.7	21.2	9.4
3.習字の道具	28.3	39.3	22.8	9.6
4.体操着	16.8	42.0	29.6	11.6
5.教科書	3.7	41.7	32.5	12.1
6.ノート	10.4	38.9	36.0	14.7
7.遠足の弁当	25.4	23.7	23.1	27.8
8.ふでばこ	0.8	29.2	37.3	22.7
9.定規	5.6	22.6	40.1	31.7
10.下じき	5.5	17.9	35.8	40.8
11.消しゴム	4.6	17.7	38.5	39.2



図5は「先生が忘れ物に対して、どう対応したらよいか」子どもにたずねた結果だが、「忘れ物はきびしくしかったほうがよい」とする子どもが半数を超えている。そしてここでも、忘れ物の多いグループと少ないグループにはその差がみられ、「忘れ物の少ないグループ」は、きびしくしかったほうがよいとする割合が高い。

ところで、忘れ物をしたら子どもは困るはずである(図6)。忘れて困る物の順位は、まず「遠足の弁当」だ。したがってめったに忘れないというのが納得できる。続いて、「習字の道具」「宿題」「提出物」「体操着」が

僅差で並んでいる。いずれも、先生にしかられる物ばかりである。反対に、「下じき」は、困らない部類に入っている。「下じき」は、忘れる回数が多いが、先生にもそれほどしかられず、また、忘れても困らない物である。しかし使うべき物だから、持ってくるはずの物がなくても困らないというのは、だれかに借りるのだろうか。

図7は、忘れたときの子どもの対応策である。例えば、教科書を忘れたとしても、となりの席の子に見せてもらえばそれで済んでしまうと、子どもたちは考えている(「友だちに借りる」79.6%)。ふてばこや消しゴムも同じ

図5 (忘れ物をしたときの先生の対応)×(忘れ物をする回数)

	(%)			
	とてもきびしく しかったほうがよい	わりときびしく しかったほうがよい	あまりきびしく しからない ほうがよい	ぜんぜん しからない ほうがよい
全 体	11.2	45.4	31.5	11.9
多いグループ	10.9	43.7	32.8	12.6
少ないグループ	7.8	44.7	28.3	9.2

である。しかし、下じきについては、借りるよりがまんする場合が多い。つまり、下じきを使わなくてもノートに書くことはできる。要するに下じきは、なくても困らないのである。ところが、同じがまんするにしても、「宿題」「体操着」は、そううまくいかない。友だちに借りるのもなかなかむずかしく、結局、

ないままに時を過ごさなければならない。「下じき」がなくてがまんするのは異質のがまんである。というより、こちらが本来の、がまんしている姿であって、「下じき」のほうは、少しもがまんしていないのだろう。つまり、前述の「困る」かどうかの問題は、忘れ物の代用品があるかどうかにかかっているらしい。

図6 忘れたら困る物

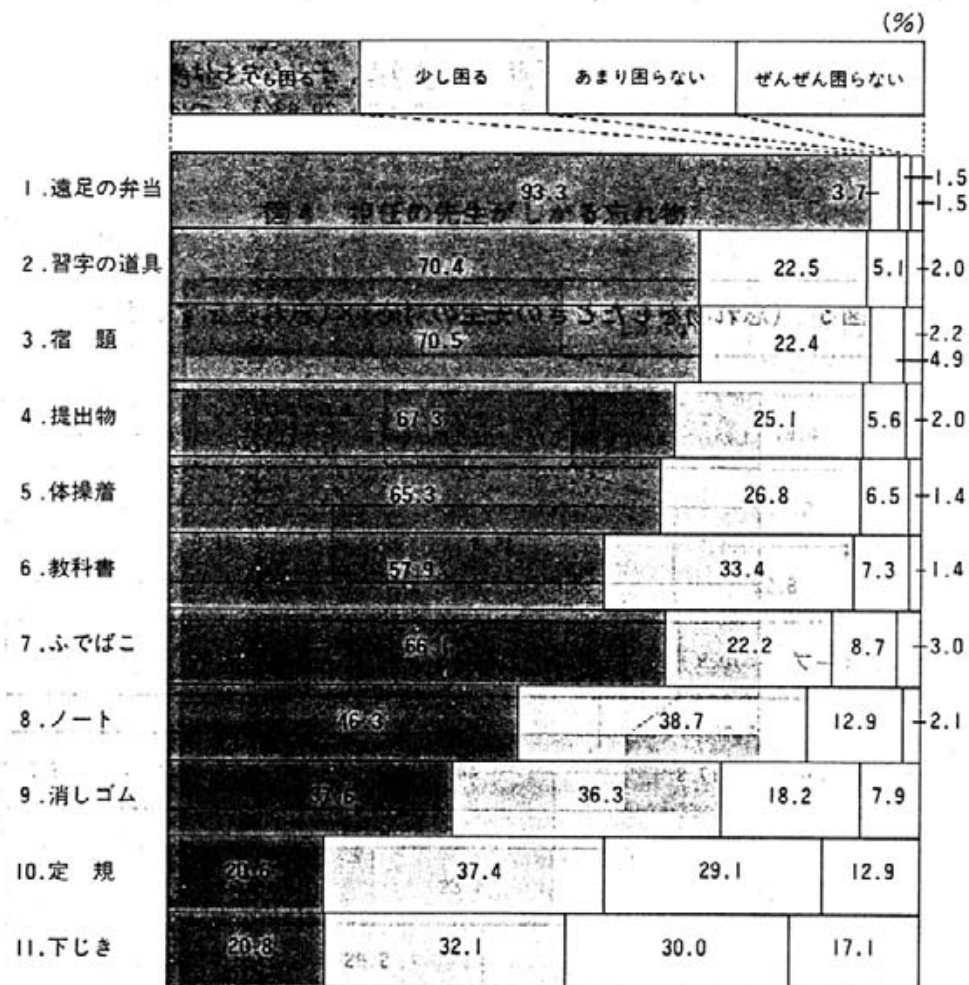
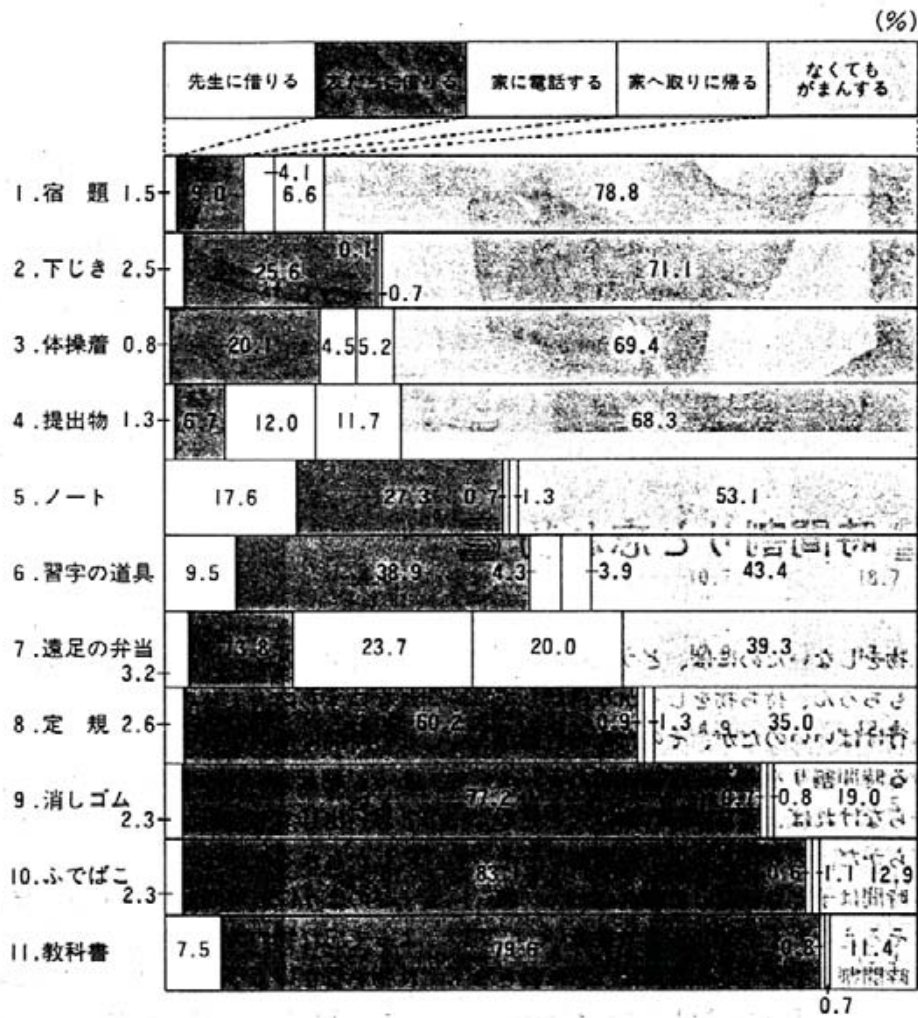


図7 忘れ物をしたら、どうするか



## 2. 忘れ物への意識



### ㊦ 時間割りと忘れ物 ㊦

忘れ物をしないためには、どうすればいいのか。もちろん、持ち物をしっかり確認して学校へ行けばいいのだが、そのための行動が、いわゆる時間割りをそろえることである。これをやらなければ、翌日の忘れ物は火を見るより明らかだ。図8によると、時間割りをそろえる時間は子どもによって様々だが、「寝る前にそろえる」子が30.6%と一番多い。

さて時間割りをそろえる時間は、忘れ物と関係があるのだろうか。表1によると忘れ物の多少にかかわらず、「寝る前にそろえる」は3割前後だが、忘れ物が少なくなるにしたがって、「掃宅後すぐに」時間割りをそろえている。逆に、忘れ物が増えるにしたがって、「次の日の朝、そろえる」割合が増えている。掃宅後すぐに次の日の準備をすれば、「明日は、

〇〇です」と学校で言われてきたことを、忘れないうちに済ませられるし、朝のあわただしい時間に準備するのは、大きなちがいがあある。朝起きて、「宿題があったんだっけ！」と思い出しても、あとのまつり。学校で先生にしかられるだけなのに。

このように、時間割りをいつそろえるかによって忘れ物の数が左右されるようだが、忘れ物をしないようにするための工夫も必要だろう。1つは、「時間割りは、なるべく早くそろえること」であるが、そのほかにも、子どもたちは、図9にあるような工夫をしている。まず、「連絡帳やメモを書く」という工夫がされている。これなら、書いてあるものを見ればよい。そして、「時間割りを2回」そろえて、確認しようとしている。



図8 時間割りはいつそろえるか

(%)

	学校から帰ってすぐ	夕食の前	夕食の後	寝る前	次の日の朝	日によってちがう
全 体	9.9	14.9	14.6	30.6	8.7	21.3
男 子	7.2	12.5	12.5	31.2	12.5	24.1
女 子	12.6	17.4	16.7	29.9	5.0	18.4

表1 (時間割りはいつそろえるか)×(忘れ物をする回数)

(%)

	多いグループ	週に1~2回 忘れる	月に1~2回 忘れる	少ない グループ
学校から帰ってすぐそろえる	4.6	< 6.3	< 10.7	< 18.7
夕食の前までにそろえる	10.2	17.6	12.9	17.1
夕食の後にそろえる	12.7	16.9	14.9	12.4
寝る前にそろえる	29.4	30.4	31.9	30.5
次の日の朝、そろえる	15.9	> 8.8	> 6.7	> 5.4
日によってちがう	27.2	20.0	22.9	15.9



ところが、忘れ物の多い子どもは、これらをあまりしていない(表2)。「連絡帳やメモ」は、「忘れ物の少ないグループ」の約半分、「2回そろえる」は、4分の1にすぎない。先の時間割りをそろえる時間とも合わせて考える

と、「忘れ物の多いグループ」の子は、忘れるべくして忘れていたのである。「忘れ物の少ないグループ」には気をつけようとしている子が9割を超え、両群には基本的な意識のちがいがみられる(表3)。

図9 忘れ物をしないための工夫

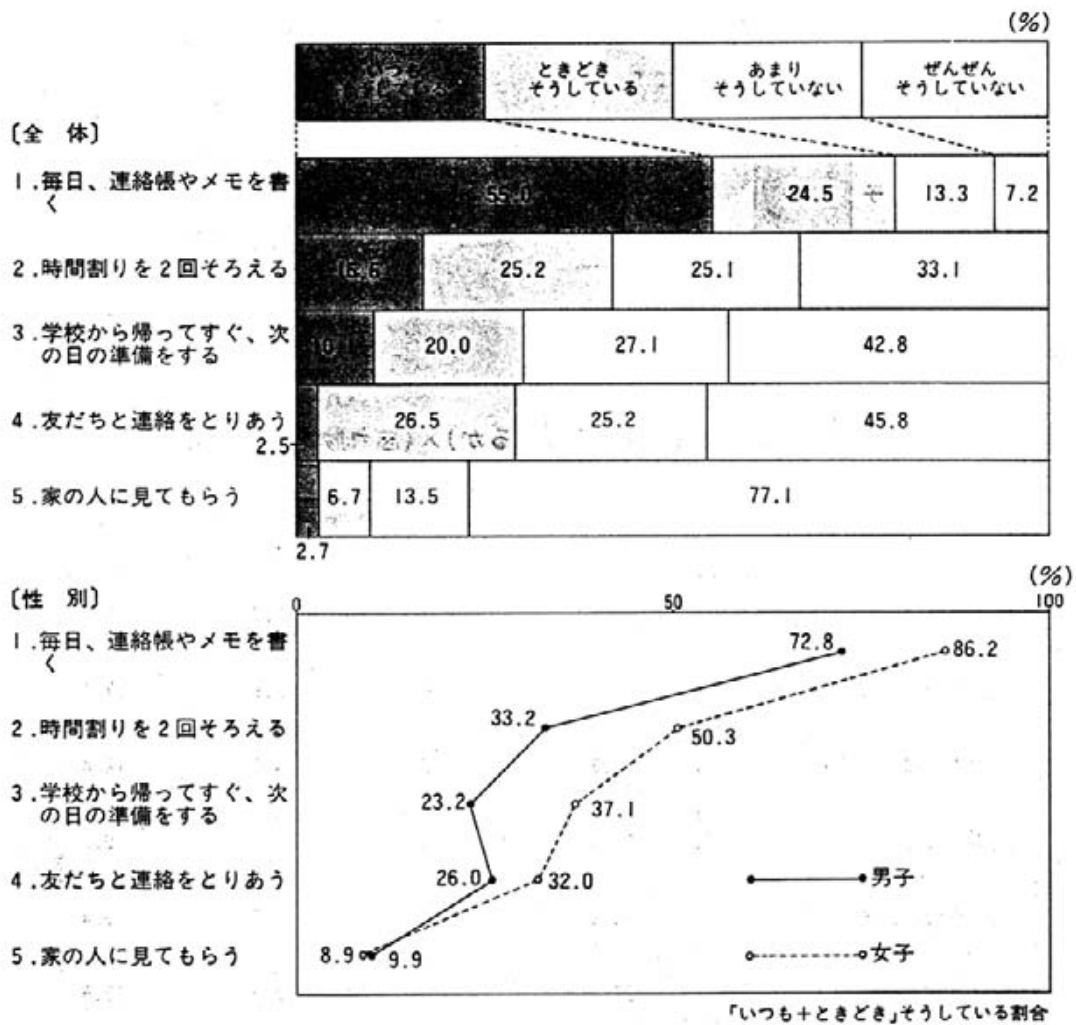


表2 (忘れ物をしないための工夫)×(忘れ物をする回数)

(%)

	多いグループ	週に1~2回 忘れる	月に1~2回 忘れる	少ない グループ
毎日、連絡機やメモを書く	36.8	< 49.5	< 60.4	< 71.3
時間割りを2回そろえる	7.3	< 14.1	< 18.2	< 27.2
家の人に見てもらう	3.6	2.3	2.3	2.9
学校から帰ってすぐ、次の日の準備をする	6.0	< 7.4	< 8.8	< 19.7
友だちと連絡をとりあう	2.1	2.7	2.0	2.9

「いつも」そうしている割合

図10 忘れ物をしないように気をつけているか

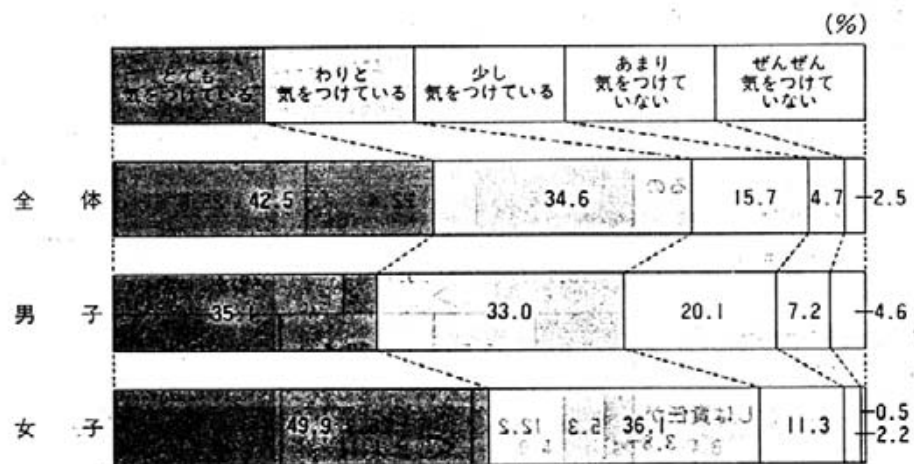


表3 (忘れ物をしないように気をつけているか)×(忘れ物をする回数)

(%)

多いグループ	週に1~2回忘れる	月に1~2回忘れる	少ないグループ
53.4	< 75.7	< 82.5	< 93.1

「とても+わりと」気をつけている割合

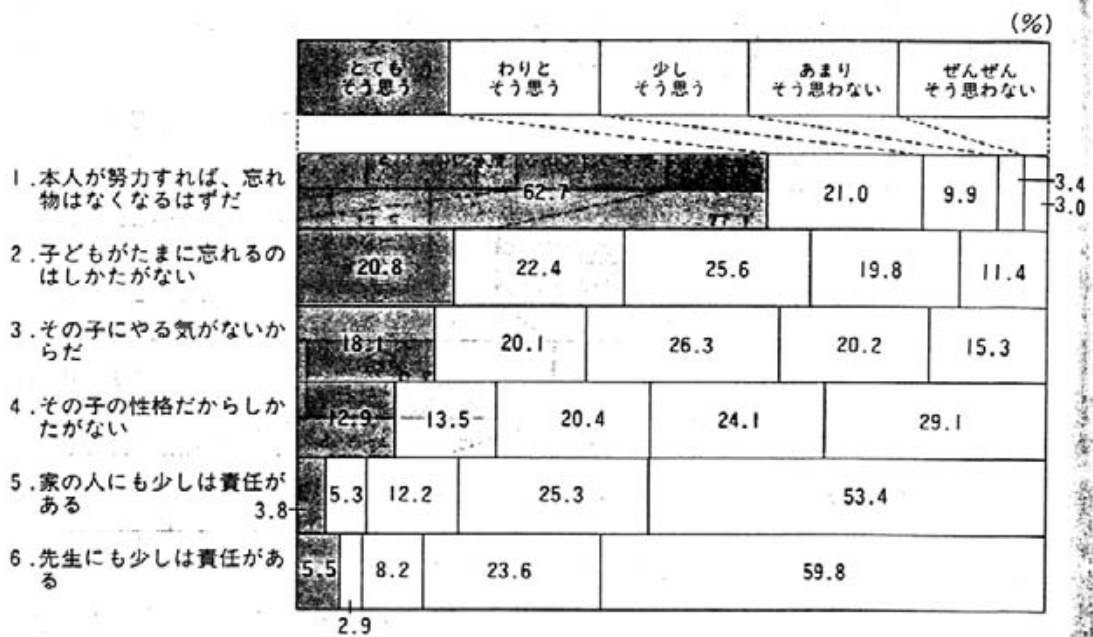
## なぜ忘れるのか

もう少し、忘れ物に対する意識を探っていこう。忘れ物について子どもたちは、「本人の努力次第でなくなる」(62.7%)と答えており(図11)、「しかたがない」とか、「やる気のなさ」を原因とは考えていないように見える。これは、忘れ物の多い少ないに関係ない傾向であるが(表4)、「忘れ物の多いグルー

プ」には「その子の性格だからしかたがない」と諦めている子も多く、また責任を家の人や先生に転嫁する傾向もある。忘れ物の多い子は、自分の努力でなんとかなると思いつつも、どこか心の中には「諦め」がひそんでいるようだ。

つまり忘れ物の多い子は、「今の自分の忘

図11 忘れ物について考えること



れ物の多さは減らないだろう」と考えているかのようだ。そして、「性格だからしかたがない」と割り切っている。しかしいつまでも、忘れ物をしてはられない。おとなになってからも、忘れ物名人だったらどうなるだろう。

図12には、おとなになったら忘れ物はどうなると考えているのかについての結果を示した。図によると、「今よりは、忘れ物をしなくなっている」と考える子が、約50%もいる(表5には、忘れ物の回数によるグループの

比較を掲げたが、グループ間の意識の差はみられない)。今はしょっちゅう忘れ物をしていても、おとなになればしなくなっているだろうと、子どもたちは考えている。しかし、おとなになっても現状維持とする子も23%前後おり、「もっと忘れ物が増える」と答えた子も10%を超えている。合わせれば3人に1人は、「忘れ物はおとなになっても減らない」と考えていることにも、注目すべきではないかと思う。

表4 (忘れ物について考えること)×(忘れ物をする回数)

(%)

	多いグループ	週に1~2回 忘れる	月に1~2回 忘れる	少ない グループ
子どもがたまに忘れるのはしかたがない	41.4	44.3	49.4	34.5
その子にやる気がないからだ (誤)	39.1	37.9	34.0	42.9
その子の性格だからしかたがない	31.5	> 27.1	> 24.4	> 21.6
本人が努力すれば、忘れ物はなくなるはずだ F.EI	79.3	< 80.9	< 86.1	< 88.0
家の人にも少しは責任がある	11.7	> 10.4	> 9.6	> 6.6
先生にも少しは責任がある	11.1	> 9.4	> 7.6	> 5.7

「とても+わりと」そう思う割合

図12 おとなになったら、忘れ物は……

(%)

	まったくしなく なっているだろう	今よりはしなく なっているだろう	今くらいして いるだろう	今よりもっと しているだろう
全 体	12.3	51.1	23.3	13.3
男 子	16.1	51.4	19.3	13.2
女 子	8.6	50.7	27.2	13.5

表5 (おとなになったら忘れ物は……)×(忘れ物をする回数)

(%)

おとなになったら、忘れ物をしなく なっているだろう	多いグループ	週に1、2回 忘れる	月に1～2回 忘れる	少ない グループ
おとなになったら、まったく忘 れ物をしなくなっているだろう	12.0	12.1	13.7	10.4
おとなになったら、今よりは忘 れ物をしなくなっているだろう	49.7	56.3	49.3	47.8
おとなになっても、今くらい忘 れ物をしているだろう	23.6	23.5	23.5	23.1
おとなになったら、今よりもっ と忘れ物をしているだろう	14.7	8.1	13.5	18.7



### 3.宿題

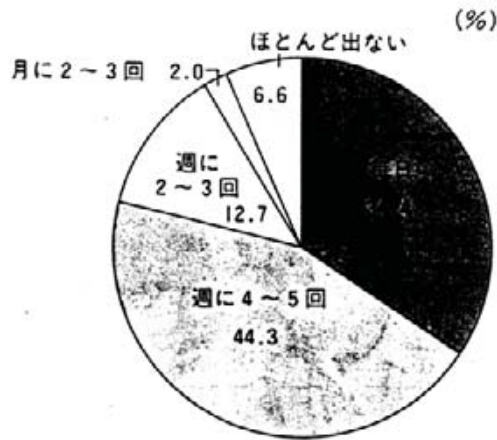


#### 忘れ物の王様「宿題」

今までみてきた忘れ物の中で、最も多いのは宿題である。宿題は忘れる回数が多いばかりでなく、忘れれば先生からしかられるうえ、自分でもとても困る。そして、たいていの場合は、急場ではカバーできない忘れ物である。本章では、この宿題を取り上げて、忘れ物に対する意識と比較しながら、話をすすめていこうと思う。

まず、宿題は一体どのくらい出ているのだろうか。図13によると、宿題が「毎日出ている」が34.4%、「週に4～5回出ている」が44.3%である。週に4～5回というのは、週6日間登校することを考えると、感触としては毎日に近い。いずれにせよ、8割近くがほぼ毎日、宿題が出ていると答えている。

図13 宿題の回数



## なぜ忘れるか

宿題を出されたら、やっていくのが普通である。図14によると、「毎回必ずやっていく」と「たまに忘れるくらいで、だいたいやっていく」を合わせると、9割に近い。多くの子どもが宿題をきちんとやっているような結果になっている。

ところが、これを「忘れ物をする回数」で分けてみると、表6のようになる。「忘れ物の多いグループ」で「毎回必ずやっていく」というのは10.2%である。忘れ物が多いグループの割には、1割というのは、健闘していると考えたい。しかし、「わりと忘れる」をみると、「忘れ物の少ないグループ」との差は歴然である。つまり、宿題をやってこない子は、毎回だいたい同じ子であるということを裏付けている結果とってよい。

そうであれば、なぜ宿題を忘れてしまうのかということになるが、いわゆる「忘れてしまっていた」というのではなく、「知っているながら、やっていない」ということも考えられる。つまり、「わざと忘れる」ということである。「わざと忘れる」という日本語はおかしいが、要するに忘れたことにしておもうということ、ここでは、便宜的に「わざ

と忘れる」としておく。これは、図15に示されているが、わざと忘れてしまったという子はやはり少なく、「わざと忘れたことはない」子が76.7%である。しかし逆に考えると、約4分の1の子は「忘れちゃえ」とばかりに学校に来た経験があるということをお話している。

ところが表7をみると、これはグループの較差が激しい。忘れ物が多いという子どもたちのうちの約半数は、「宿題が出ているのを知っていてやっていない」という経験者で、そのまた半数（つまり、全体の4分の1）は、そういうことがだいたいあると答えている。本当に忘れてしているというだけではないのである。「忘れる」ではなく、「やらない」ということも含まれているのである。

しかし、忘れる（または、やらない）という理由は、ほかにもあるだろう。図16は、その理由をたずねてみたものであるが、「本当に忘れてしまっている」よりも、「めんどろなのでやらない」が上回っている。「むずかしくて」とか、「時間がなくて」ということも考えられるが、それよりも「やらなくてもいいと思っている」ということらしい。

いずれにしても、やらなくても済んでしまうということも1つの問題であるように思う。そして、宿題を忘れることに慣れてしまっている子は、先生にしかられるのにも慣れ、困ることにも慣れ、結局、また同じことをくり返すことになるのだろう。宿題をやることに

対する意識がちがうようである。したがって、たとえ宿題をやっていないことに気づき、「もう一度起きてやる」という気持ちにもなるが、「やらない」で済ませてしまう(14.9%)ことになるのだろう(図18、表8)。

図14 宿題が出されたら

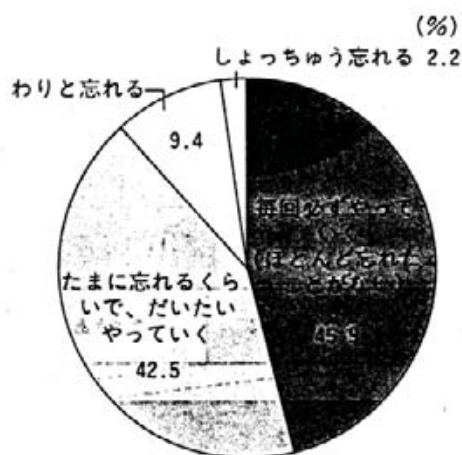


表6 (宿題が出されたら)×(忘れ物をする回数)

忘れ物をする回数	(%)			
	多いグループ	週に1-2回忘れる	月に1-2回忘れる	少ないグループ
毎回必ずやってくる(ほとんど忘れたことがない)	10.2	< 32.5	< 54.4	< 85.2
たまに忘れるくらいで、だいたいやってくる	46.1	59.2	43.7	13.9
わりと忘れる	34.1	> 7.6	> 1.5	> 0.9
しょっちゅう忘れる	9.6	> 0.7	> 0.4	> 0.0



図15 宿題をわざと忘れたこと

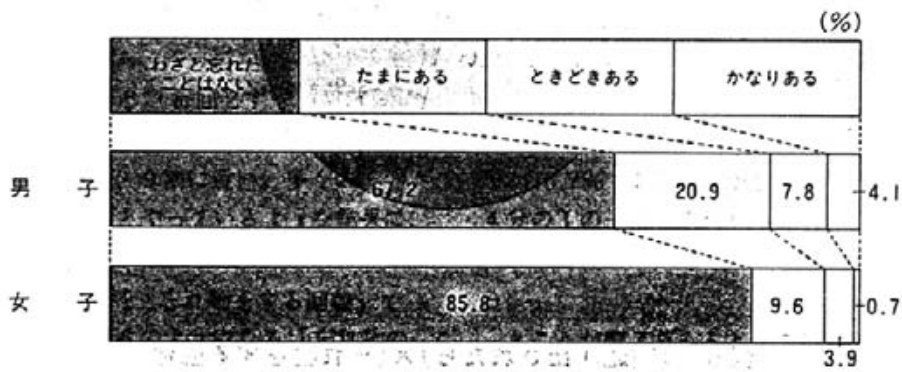
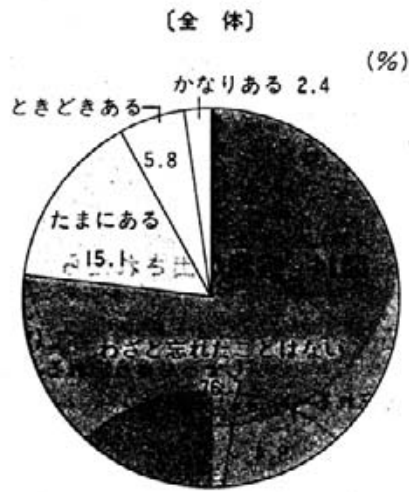


表7 (宿題をわざと忘れたこと)×(忘れ物をする回数)

(%)

わざと忘れたこと	多いグループ (S.82)	週に1-2回忘れる (S.82)	月に1-2回忘れる (S.82)	少ないグループ
わざと忘れたことはない	54.9	< 72.2	< 83.8	< 91.5
たまにある	22.7	> 20.3	> 12.4	> 5.7
ときどきある	14.0	> 6.4	> 2.9	> 1.9
かなりある	8.4	> 1.1	> 0.9	= 0.9

図16 宿題を忘れる理由

(%)

	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. めんどいのでやらない	23.5	20.4	14.8	14.3
2. 本当に忘れてしまっている	22.2	29.4	17.4	15.9
3. やらなくてもいいと思っている	14.2	16.1	18.7	31.4
4. むずかしいのでできない	15.5	23.4	25.2	26.0
5. 時間がなくてできない	11.7	20.5	25.0	32.4

図17 (宿題を忘れる理由)×(忘れ物をする回数)

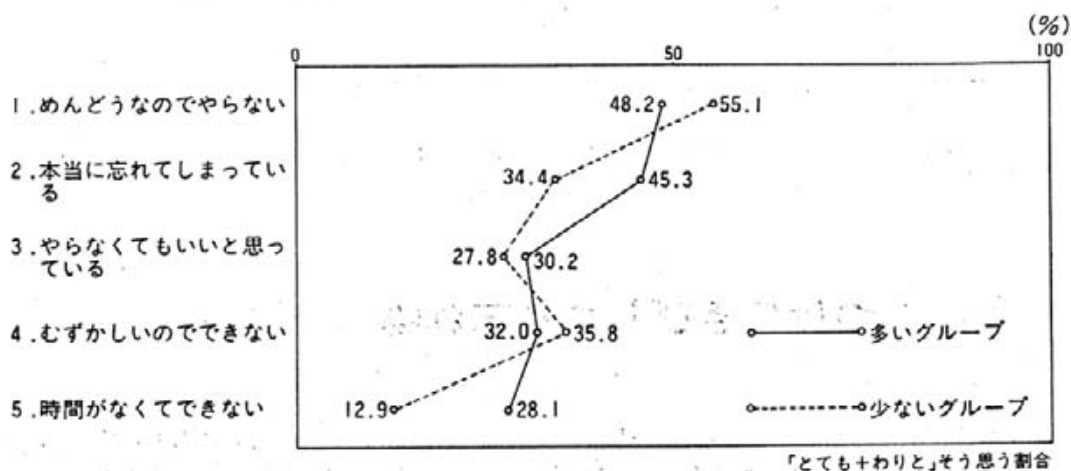




図18 宿題をやっていないと気づいたら

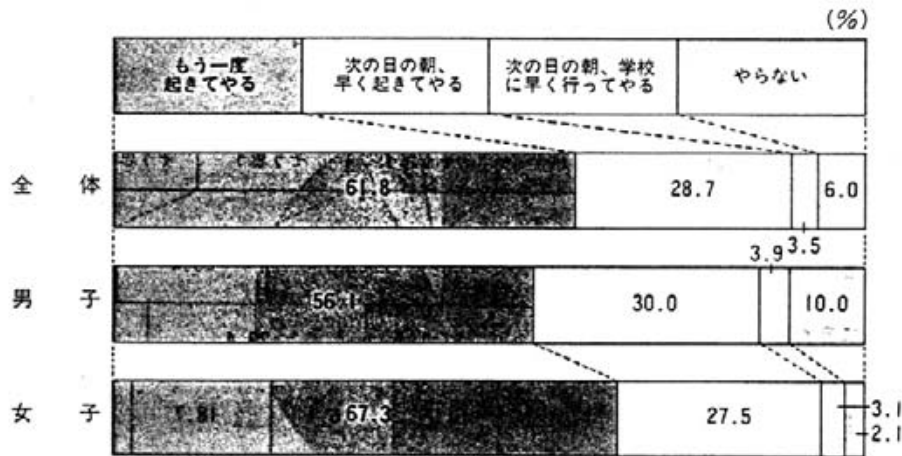


表8 (宿題をやっていないと気づいたら)×(忘れ物をする回数)

(%)

	多いグループ	週に1~2回 忘れる	月に1~2回 忘れる	少ない グループ
もう一度起きてやる	50.7 <	60.6 <	63.1 <	72.4
次の日の朝、早く起きてやる	29.2	29.6	30.9	23.5
次の日の朝、学校に早く行ってやる	5.2 >	4.9 >	2.0 >	1.6
やらない	14.9 >	4.9 >	4.0 >	2.5

## しつけのきびしさと忘れ物

さて、宿題を忘れたことを担任の先生が見逃すはずはない。一方、家の人も、「今日、宿題やったの？」などと促すはずである。そうした周りの環境は、忘れ物と結びつくのだろうか。先にも、忘れ物に対する先生の対応についてふれたが、ここでは生活全体にわたって、先生や家の人の態度も含めながら考えたい。

図19は、担任の先生のきびしさについて、

子どもたちの回答を求めたものである。これによると、先生は、「忘れ物のこと」(「とても」+「わりと」を合わせると49.4%)、次いで「宿題のこと」(同46.4%)、「勉強のこと」(同44.4%)の順で、きびしいという。やはり、担任としての思いが込められている結果ではないかと思う。

そして、その先生は、子どもたちが宿題を忘れたときに、どのような対処をするのだから

図19 担任の先生のきびしさ

(%)

	とても きびしい	わりと きびしい	少し きびしい	あまり きびしくない	ぜんぜん きびしくない
1.忘れ物のこと	27.8	27.6	24.1	18.8	7.7
2.宿題のこと	19.2	27.2	27.5	19.3	6.8
3.勉強のこと	13.8	30.6	31.7	18.1	5.8
4.整理整頓のこと	11.8	21.6	28.0	26.4	12.1
5.行儀や礼儀のこと	18.9	20.5	26.0	23.0	11.6
6.友だちのこと	14.2	16.6	22.6	27.8	18.8
7.遊び方のこと	5.3	9.2	19.6	34.1	31.8

うか。それを図20に示した。子どもが宿題を忘れると、まず先生は「表などにチェック」しておく。そして、宿題をやっていない分、「休み時間にやらせる」か、「放課後にやらせて」、ほかの子どもとの歩調を合わせるようにする。もちろん「きびしくしかる」ということもある。

こういう先生の対応のしかたを、子どもたちはどう捉えているのだろうか。図21をみると、74.5%の子どもが、「宿題を忘れた本人が、自分で損をすることをいずれはわかるはずだから、少ししかるだけでよい」と考えていることがわかる。これについては、グループ間の差はみられなかった。

また、先生だけでなく、家人の対応のしかたも少し探してみたい。図22では、先生の項目と同じものをたずねたが、やはり、「宿題について」は、きびしい態度をとっている。

この図で見ると、「忘れ物について」の項目は、下のほうの位置にあるが、実際に先にふれた先生との結果と比較してみると、差はそれほどでもないことに気づく(図23)。

図によると、家の人、全体的にわが子に対してきびしい態度で臨んでいる。先生は、「友だちのこと」や「遊び方のこと」については家の人よりもきびしいが、これは仲間関係を考えたとき、当然といえよう。ただ、このきびしいという判断のしかたであるが、忘れ物の多い子は、当然しかられる回数も多くなり、その結果、「先生はきびしい」ということになるので、ここでは、先生が忘れ物についてきびしいから、忘れ物の数がどうなるかというコメントはできない。ただ、先生がきびしかったり、親がきびしかったりという周りの環境があれば、忘れ物は(なくなりとはしなくとも)減ることは考えられる。

図20 宿題を忘れたとき、担任の先生は……

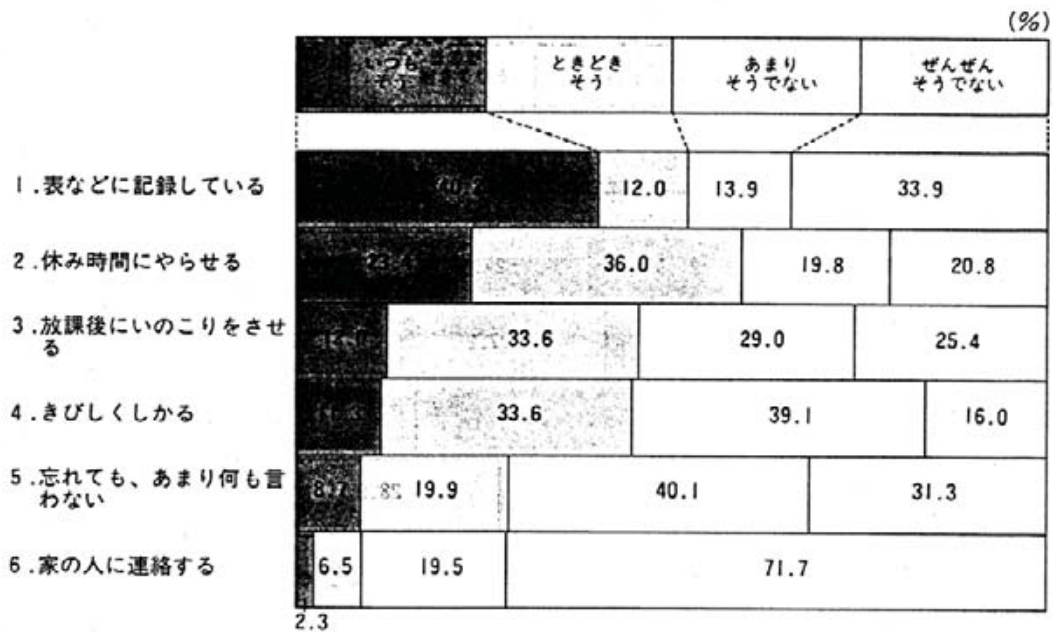


図21 宿題を忘れたときの先生の対応はどうしたらよいか

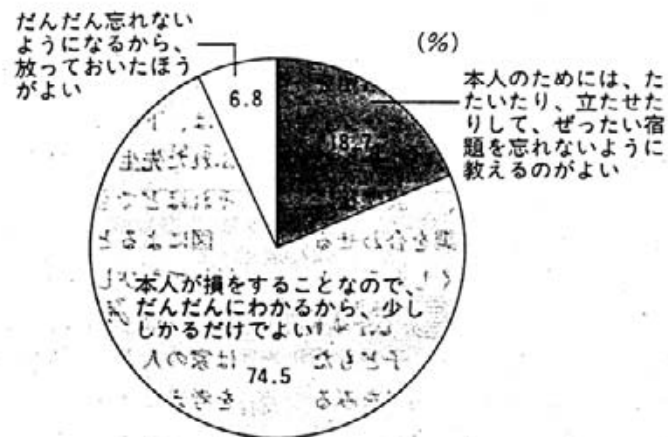
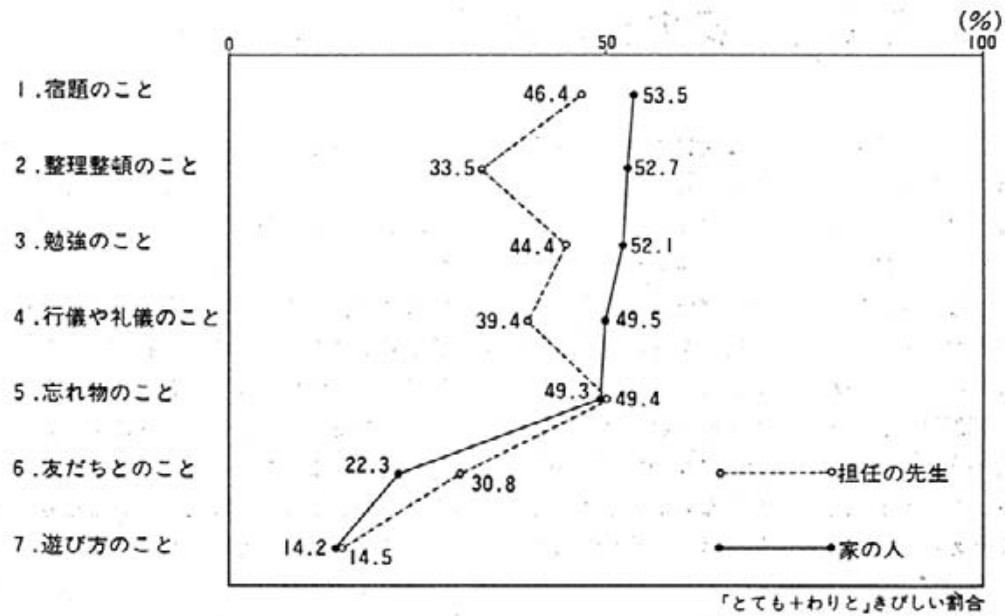


図22 家の人のきびしさ

(%)

	とても+わりと きびしい	少し きびしい	あまり きびしくない	ぜんぜん きびしくない
1.宿題のこと	26.2	25.9	13.3	7.3
2.整理整頓のこと	29.7	26.6	14.5	6.2
3.勉強のこと	27.3	24.5	17.6	5.8
4.行儀や礼儀のこと	25.5	25.3	16.9	8.3
5.忘れ物のこと	27.2	28.4	15.7	6.6
6.友だちとのこと	13.5	20.7	29.8	27.2
7.遊び方のこと	9.1	15.7	31.9	38.2

図23 担任の先生と家の人との比較





## 4. 忘れ物をする子ども



### 子ども自身のタイプ

忘れ物そのものは、先に図11で、「本人の努力次第だ」と子どもたち自身が言っているように、やはり個人的な要因によるものと思われる。図11では、「本人の性格だからしかたがない」ということもあったが、最後に、子どもたちの自己像と忘れ物の多さの関係にふれ、本報告を終わりたいと思う。

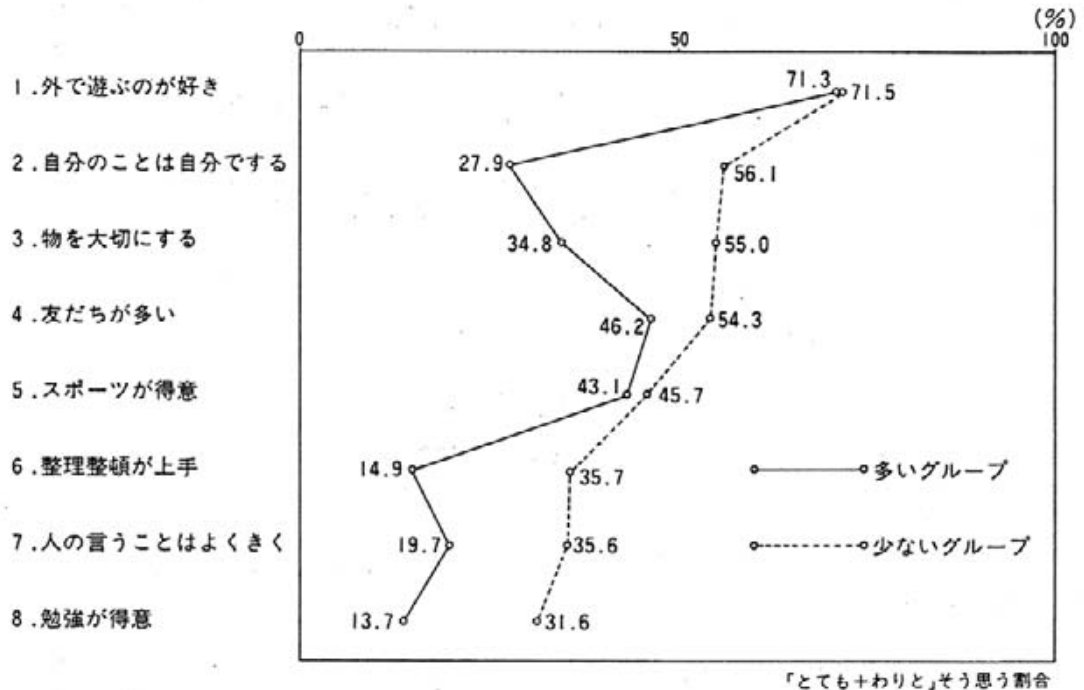
図24には、子どもの考える自己像と、忘れ物の多いグループ、少ないグループの関係を示した。忘れ物をするかしないかの要因として考えられる自己像の第一は、「自分のことは自分でする」（多いグループと少ないグループの差、28.2%）ということである。つ

まり、自分で考え、自ら行動することができる子どもは、忘れ物が少ないことになる。生活の中で常に頭を働かせてきている子どもたちである。

次には、「整理整頓が上手」（同20.8%）な子どもが続く。明日の持ち物が、きちんと整理できるかがポイントになっているようだ。そして3番目は、「物を大切にする」（同20.2%）ということである。物に対する執着を考えたとき、また、物に対する関心を考えたとき、こういう子どもの忘れ物が少ないのは、当然のことといえよう。



図24 (自己像)×(忘れ物をする回数)



## まとめに代えて

子どもを預かる学校現場としては、忘れ物がまったくなくなることにこしたことはないが、この点では多少減ることはあっても、皆無になることはむずかしいだろう。しかし少しでも減らすことができれば、教育効果があ

ったと考えていいのではないか。忘れ物をする子どもの理由は、どうやら様々あるようだが、一人一人個に応じて対応していく教育の必要性は、忘れ物についても同じであろう。